

日本スポーツ社会学会会報

Vol. 67



＝目次＝

1. 日本スポーツ社会学会第26回大会実施要項 … 2
 2. 今後の研究企画 … 5
 3. 研究委員会からの報告 … 6
 4. 編集委員会からのお知らせ … 6
 5. 国際交流委員会からのお知らせ … 6
 6. 電子ジャーナル委員会からのお知らせ … 7
 7. 創立25周年記念誌編集委員会からのお知らせ … 8
 8. 2016年度第1回理事会議事録 … 9
 9. 影山健会員追悼 … 12
 10. 事務局からのお知らせ … 16
- 編集後記 … 17

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
広報委員会 2016年12月

1. 日本スポーツ社会学会第26回大会実施要項（会場：信州大学教育学部）

1. 開催期間

2017年3月18日（土）・19日（日）

2. 会場

信州大学教育学部 〒380-8544 長野市西長野 6-10（イロハの口）

○アクセス方法

- JR長野駅・善光寺口・バス乗り場から中心市街地循環バス「ぐるりん号」に乗車、「信大教育学部前」まで約10分（150円）

<https://www.alpico.co.jp/access/nagano/gururin/>

- JR長野駅から徒歩約30分

○宿泊関係・・・宿泊の斡旋はしておりません。

3. 主催

日本スポーツ社会学会 <http://www.jsss.jp/>

4. 日程（予定）

1月17日（金）16:00～（旧）理事会 教育学部第2会議室

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
18日 （土）		（新）理事会 10:00～12:00		受付	一般発表 13:00～15:00	国際交流 委員会 企画 【特別 講演】 15:00～ 16:00	大会実 行委員 会企画 【特別 講演】 16:00 ～ 17:00	学 会 総 会	懇 親 会	
		学生 フォーラム 10:30～ 12:00								
19日 （日）	一般発表 9:00～12:00				一般発表 13:00～ 14:30	研究委員会企画 シンポジウム 「スポーツと 視覚」 14:30～16:30				

※1 この日程は、演題数や各委員会の企画内容により変更になる場合があります。

※2 各委員会の企画内容については、詳細が決定次第、HPに掲載します。

※3 大会実行委員会企画特別講演は、山本哲士先生（文化科学高等研究院）、「スポーツのホスピタリティと身体技術の非分離・述語制」を予定しています。

○懇親会

日時：3月18日（土）18:00～（予定）

会場：ホテル国際 21/藤の間（1F） ※会場から徒歩10分

会費：5,000円（学生会員4,000円）

5. 大会までの主なスケジュール

事 項	締 切 日
一般研究発表申込締切	2017年1月23日(月)
大会参加早期申込(早割)締切	2017年2月3日(金)
一般研究発表抄録提出締切	2017年2月20日(月)

6. 大会参加申込

日本スポーツ社会学会第26回大会 HP (<http://jsss.org/>)「参加申込み」ページから、その指示に従って必要事項を記入の上、送信してください。参加費の早期割引を受けるためには、HP上の「申込み手続き」および「入金」がともに**2017年2月3日(金)**までに完了していることが必要です。

【参加申込先】第26回大会 HP <http://jsss.org/>

【参加費】参加申込と同時に「郵便振替票」にて大会参加費を大会実行委員会口座までご送金ください。

☆早割・・・**2017年2月3日(金)**まで☆

正 会 員 11,000円 (懇親会不参加の場合 6,000円)

学 生 会 員 7,000円 (懇親会不参加の場合 3,000円)

★**2017年2月4日(土)**以降★

正 会 員 12,000円 (懇親会不参加の場合 7,000円)

学 生 会 員 8,000円 (懇親会不参加の場合 4,000円)

非会員・一般 13,000円 (懇親会不参加の場合 8,000円)

非会員・学生 9,000円 (懇親会不参加の場合 5,000円)

【参加費振込先】※下記の二つから選ぶことができます

①普通口座 11180-42096551

(ゆうちょ銀行口座をお持ちの方はこちらが便利です)

②振替口座 00550-4-86694

(他行から払い込みをされる方はこちらがお得です)

口座名称 (①②とも同じ) 「日本スポーツ社会学会26回大会実行委員」

※口座名称について、ゆうちょ銀行の規定で、20文字の制限がありますので、「第26回大会」ではなく「26回大会」になっておりますので、ご注意ください。

7. 一般研究発表

(1) 発表申込締切日 **2017年1月23日(月)**

大会 HP の発表申込みページから、その指示に従って必要事項を記入し、送信していただくことで発表申込みができます。発表内容については、上記ページの該当箇所に 1,200～1,600字程度(英文の場合は300ワード程度)の概要を記入し送信してください。

(2) 一般研究発表の資格に関する注意事項

「日本スポーツ社会学会大会開催に関する規定」第5条による、一般研究の発表者の資格は以下の通りです。

- ①発表者および共同研究者は、日本スポーツ社会学会会員であること。
- ②発表者および共同研究者は、その年の年会費を納めていること。
- ③発表者は大会参加費を納めていること。
- ④大会に参加しない共同研究者は、大会参加費を納める必要がないこと。

※発表者は、「年会費」「大会参加費」の納入についてご確認ください。未納の場合は発表できません。納入の確認が必要な場合、年会費については学会事務局へ、大会参加費については学会大会実行委員会へお問い合わせください。

学会事務局メールアドレス jsss jimukyoku@gmail.com

学会大会実行委員会メールアドレス hashimo@shinshu-u.ac.jp

(3) 発表抄録原稿の提出締切日 2017年2月20日(月)

発表申込をしていただいたのち、研究委員会にて審査がおこなわれます。審査を経て、学会発表が許可されたものについては、発表抄録の原稿を提出していただきます。発表抄録原稿用テンプレートは、大会 HP からダウンロードできます。書式を利用するには、Microsoft Office Word 2007（あるいはそれ以上の年式）が必要です。テンプレートの書式に従って作成いただいた原稿は、2017年2月20日(月)までに、以下のメールアドレス宛に添付ファイル送信してください。

※1 発表抄録原稿受付メールアドレス hashimo@shinshu-u.ac.jp

※2 件名に「日本スポーツ社会学会発表抄録」と記載してください。

(4) 一般研究発表に関する注意事項

一般研究発表の時間は、発表20分、質疑応答10分です。発表の際に必要な機器がある場合（PC、プロジェクタ、VTR(VHSのみ対応)、DVDなど）は、発表申込みの際に、当該箇所にその旨を記載して、申し出てください。パワーポイントによる発表を希望する方は、できるだけUSBメモリにデータを持参してください。当日、発表資料を配付する場合は、各自で70部以上を持参してください。

8. 昼食について

学会大会開催時、キャンパス内の食堂は休業中ですので、大学周辺および善光寺周辺の飲食店等をご利用ください。

9. 学会大会実行委員会について

実行委員長 橋本純一（信州大学学術研究院総合人間科学系）

委員 橋本政晴（信州大学学術研究院教育学系）

【第26回大会HPならびに問い合わせ先】

第26回大会ホームページ：<http://jsss.org/>

問い合わせ Email：hashimo@shinshu-u.ac.jp



2. 今後の研究企画

(1) 第2回関西学生フォーラム

日時：2017年1月28日(土) 14:00～(予定)

会場：龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」2階研修室

京都市営地下鉄「丸太町駅」2番出口から徒歩6分

内容：①個人研究報告会(1人あたり25分報告+15分討論を目安とする)

②来年度の関西学生フォーラム活動予定に関する会議

③懇親会

報告申込締め切り：2016年12月23日(金)

※報告希望者は所属・氏名・演題を明記して下さい

問い合わせ先：mizu.koki.mizu@gmail.com (関西大学大学院：水出幸輝)

(2) 第26回大会研究委員会企画

(1) 研究委員会企画シンポジウム

タイトル：「目の見えないアスリートからスポーツ社会学は何が学べるか(仮)」

日時：2017年3月19日(日) 14:30～16:30

概要：研究委員会では、昨年度に引き続き、「スポーツと視覚」をテーマにしています。学会大会のシンポジウムでは、視覚障害をもったアスリートのスポーツ経験から、スポーツ社会学は何が学べるかについて、探究します。

登壇者(順不同)：

伊藤亜紗：東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。著書に『目の見えないアスリートの身体論』など。

木村敬一：東京ガス所属・日本パラリンピアンズ協会理事。1990年9月11日 滋賀県栗東市出身。2歳の時に病気のため視力を失う。10歳から水泳を始め、単身上京した筑波大学附属盲学校(現・筑波大学附属視覚特別支援学校)で水泳部に所属。着実に実力を上げ頭角を現す。高3で2008年北京パラリンピックに出場、日本大学4年時に出場した2012年のロンドンパラリンピックでは、100m平泳ぎで銀メダル、100mバタフライで銅メダルと念願のメダルを獲得した。2016年リオデジャネイロパラリンピックで銀メダル2個、銅メダル2個の快挙を成し遂げた。

マルソー・シュノー (Marceau CHENAULT)：華東師範大学(上海) 体育と健康学部博士課程研究員及び講師、ニース大学(フランス) 人類学及び臨床・認知・社会心理学研究所連携研究員、上海市気功研究所指導員。研究テーマ：アジアの心身技法のグローバル化に関する人類学的研究、ブラインド・エクササイズ指導の研究。

(2) 学生フォーラム

タイトル：「スポーツにおける権力としてのマスキュリニティ再考」

登壇者：岡田桂(関東学院大学)、兼子歩先生(明治大学)

日時：2017年3月18日(土) 10:30～12:00



3. 研究委員会からの報告

(1) 11月関東学生フォーラムの報告

開催日：11月27日（日）16:00～18:00

場 所：東京理科大学神楽坂キャンパス

概 要：3月の学生フォーラム企画に向けた準備という趣旨のもと、竹崎一真会員（筑波大学大学院）による発表（「男性性と身体：新たなスポーツ・マスキュリティ研究に向けて」）、青野桃子会員（一橋大学大学院）による文献に関する書評発表がそれぞれ行われた。竹崎会員からは、3月に招待する予定の岡田桂氏（関東学院大学・本会会員）および兼子歩氏（明治大学・非会員）の業績と、日本および英語圏のスポーツ社会学におけるマスキュリティ研究の歴史と展開について報告があった。青野会員からは、上記2名の登壇予定者の主要業績に関する書評が発表された。参加者は7名であったが、企画の構成について活発な議論がなされた。

研究委員長 リー・トンプソン（早稲田大学）



4. 編集委員会からのお知らせ

『スポーツ社会学研究』投稿論文募集中

2016年4月より、『スポーツ社会学研究』への投稿は、締め切り日を廃止し、いつでも投稿できるように通年受付としました。また掲載が決まった論文についてはJ-Stageにて早期公開を行っています。

現在第25巻第1号（2017年3月刊行予定）の編集を進めていますが、次の第25巻第2号（2017年10月刊行予定）に向けての投稿もお早めにご応募下さるようお願いいたします。新しい方式では、査読回数も増やし、より論文の完成度を高められるようになっていきます。学会HPの『「スポーツ社会学研究」の発行に関する規定』をご熟読の上、編集委員会(jjosshensyu@gmail.com)まで投稿下さい。尚、投稿等に際しご質問等ございましたら、同じく編集委員会までメールにてお問い合わせください。ご応募のほどお待ちしております。

編集委員長 山下高行（立命館大学）



5. 国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会では、来年の学会大会に合わせて、前の国際スポーツ社会学会会長で、日本でも大変馴染みのある方も多い、Elizabeth C.J. Pike先生を招聘することになりました。先生の現在のご所属は以下の通りです。

Head of Department, Sport Development and Management
Reader in the Sociology of Sport and Exercise

Chair of the Anita White Foundation

University of Chichester / College Lane / Chichester , UNITED KINGDOM

Pike 先生の近年のご研究テーマである“**Aging and Sports**”や、スポーツ社会学の国際的な動向等についてお話を伺えればと思っております。

あらためて会員の皆様にはお知らせいたしますが、現在のところ、以下のようなスケジュールを立てております。

(1) プレ講演会

日時 2017年3月15日(水) 13:00~14:00

場所 東京学芸大学 中央講義棟 S410 教室

(2) 学会 Keynote スピーチ

日時 2017年3月18日(土) 15:00~16:00

場所 信州大学 (第26回日本スポーツ社会学会会場)

多くの皆様のご参加をお待ちしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

国際交流委員会委員長 松田恵示 (東京学芸大学)



6. 電子ジャーナル委員会からのお知らせ

すでに学会 ML で連絡していますが、2009 年から 2015 年までの既刊誌につきまして、J-Stage での電子公開が全て完了しました。現在は 2016 年の『スポーツ社会学研究』第 24 巻第 2 号までの投稿論文、並びに第 23 巻第 2 号 (2015 年) の特集論文の公開が完了しています。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjsss/24/0/_contents/-char/ja/

また、編集委員会で受理した投稿論文について、11 月 30 日から論文の早期公開を開始しました。すでに第 1 号となる論文が掲載されていますのでご覧ください。早期公開論文は 2017 年 3 月刊行予定の『スポーツ社会学研究』第 25 巻第 1 号に掲載され、J-Stage 上で本公開に切り替わります。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsss/advpub/0/advpub_25-01/_article/-char/ja/

以下は前号の再掲ですが、電子化の過程でご承知おきいただきたいのが以下の文献表記方法です。早期公開論文の PDF は紙媒体が刊行されていないため、通頁をふることができず、論文上の頁番号がふられています。これが本公開時には紙媒体の頁をふった PDF に差し替わります。早期公開論文を引用される場合、文献情報に早期公開論文であること、DOI、論文上のページを書き込んでください。DOI を表記いただくと、早期公開から本公開に変わった際に、自動的に最新の PDF に飛ぶことになっています。DOI は早期公開論文のトップページに記載されています。学会誌が刊行された後、引用方法は通常の規定に従います。

詳しい表記方法は「スポーツ社会学研究 (電子ジャーナル) 発行に関する規程」(学会

HPで見られます)の6項を参照してください。

http://www.jsss.jp/_src/sc317/4_201603_ejournal_kitei.pdf

例) 谷口勇一, 2014, 「部活動と総合型地域スポーツクラブの関係構築動向をめぐる批判的検討—『失敗事例』からみえてきた教員文化の諸相をもとに—」, 日本体育学会編『体育学研究』(早期公開論文), 1-4,
<http://doi.org/10.5432/jjpehss.13078>.

また、早期公開の開始に伴い、昨年度整備した「スポーツ社会学研究(電子ジャーナル)発行に関する規程」の改定作業を進めています。具体的な変更点は2点です。1点目は、事務的なことですが、早期公開論文であることを表記する形式をJ-Stageの仕様に合わせて変更します。2点目は、紙媒体刊行まで2ヶ月をきってから受理した投稿論文は、日程的な問題から原則として早期公開を行わず、直接本公開を行うように委員会で検討しています。来年3月の理事会で改訂を承認いただくことにしています。

以上、電子ジャーナル委員会からの報告です。

電子ジャーナル委員長 石坂友司(奈良女子大学)



7. 創立25周年記念誌編集委員会からのお知らせ

創立25周年記念誌の配布に関して

大変お待たせしてしまいましたが、会員の皆様のお手元に、日本スポーツ社会学会25周年記念誌が届いていることと存じます。

本学会発足以来の25年の歩みがまとめられたものとなっておりますが、発足当時にはまだ電子データでの取り扱いなどほとんどなく、資料の収集から整理まで、ほんとうに多くの会員の皆様のお力添えをいただきました。あらためまして、心より御礼申し上げます。不十分な点が残っているかもしれませんが、またご指摘等いただけましたら幸いです。

また、今回の編集作業は、井上俊顧問、池井望顧問、伊藤公雄会員、松村和則会員、杉本厚夫会員、菊幸一会員、坂なつこ会員、高尾将幸会員、松田恵示で構成する編集委員会で行いましたが、とりわけ、井上俊顧問、池井望顧問のお力なくしては成り立たないものでした。実務を含めすべての面においてリードしてくださいましたことを、会員皆様にもぜひお伝えできればと存じます。

25年後には、「50周年記念誌」の発行が期待されますが、これから、どんな25年を本学会はまた歩んでいくのでしょうか。さらに、100周年、200周年といったときが、いずれやってくるのでしょうか。幹事としてほんとうに不甲斐なかった自分自身の思いとは別に、ふと立ち止まって、「現在」というものを少し見つめ直してみるきっかけを与えてくれる気がするものでもありました。会員の皆様にも、また末長く、ご愛読、ご活用頂けましたら幸いです。

創立25周年記念誌編集委員会・幹事 松田恵示(東京学芸大学)



8. 2016 年度第 1 回理事会議事録

期 日：平成 28 年 8 月 26 日（金）16：00～19：00

場 所：立命館大学梅田キャンパス

出席者：石坂、菊、倉島、後藤、坂、杉本、高峰、松尾、松田、水上、山下（以上、理事）、
高尾（事務局次長）

欠席者：石岡、清水、トンプソン、中江（以上、理事）、内海、黒田（以上、監事）

1. 議事録の確認

杉本理事長から前理事会の議事録に関する確認が求められたが、確認事項や異議などはなかった。

2. 報告事項

2-1 各種委員会

・編集委員会

山下委員長より、新システム移行後の現況を中心に活動報告があった。8 月現在でこれまで計 6 本の投稿があり、業務全般もスムーズに進んでいるものの、編集長の負担が大きいことや、二重投稿に関する問題が生じており、何らかの改善が必要になるとのことだった（審議事項も参照）。

・研究委員会

水上委員より、2016 年度の活動状況および予定、会計について報告があった。この中で 2016 年 7 月 24 日に開催された関西学生フォーラム内のある発表が複数の院生および学部生によって報告されているが、彼らは本会会員なのかどうかという質問があり、おそらく本会会員ではないということだった。参加についてはオープンにすることで本会のすそ野を広げることにつながるが、他方で、非会員が学術的な業績をあげる場として相応しいかどうかについては、議論が必要であるとの意見が出された。今後、研究委員会で規約あるいは申し合わせ事項にあたるものの原案を作成し、次回理事会にて審議することになった。

・国際交流委員会

松田委員長より、今後の予定について報告があった。具体的には、ISSA 関係者の招聘候補として Elizabeth Pike 氏（元会長）を予定しているとのことだった。また、韓国国際スポーツ社会学会との協力については、ジョンヤンリー（元会長）に連絡中であり、山下会員の協力を仰ぎつつ関係の再構築に取り組んでいくとのことだった。

・広報委員会

高峰委員長より、J-stage 掲載論文のリンク先を HP 上にアップする作業等の活動について報告があった。なお、通常の経費に加え、5 年分のタイトル入力に関わるバイト代として 4,000 円を支出したとのことだった。

・電子ジャーナル委員会

石坂委員長より、電子ジャーナル化の進捗状況、予算の執行、記事別のアクセス数等について報告があった。早期公開については、刊行まで 1 ヶ月を切った論文は校正作業等で結局 1 ヶ月が費やされるため、原則として早期公開しないという方針を進めるとのことだった。このことについて、会員には総会で周知しているが、規程に書き加えることとした。また、記事別のアクセス数については、周囲から本会が発信している研究に

どのように関心をもたれているかを探る情報源となる可能性があるため、電子ジャーナル委員会で更なる活用方法を検討してほしい、との要望が上がった。

- ・ 創立 25 周年記念誌編集委員会

松田委員長より、編集の進捗状況について報告があり、現在、第 2 校の校正中であるとのことだった。出版作業は、社会学関係書の刊行で実績のある（株）書肆クラルテに依頼するとのことだった。創文企画およびクラルテの見積りが資料として提示された。

中心的に作業をされている先生方への謝礼は支出しないのかという質問が出たが、委員としての活動であるため報酬を出すことは考えていないとの回答だった。また、同委員会の中から電子化を検討してもいいのではないかと提案が上がっているが、理事会としても前向きに進めるということで意見の一致を見た。配布の対象および範囲についても、今後、更に検討を進めるとのことだった。

- ・ 事務局

坂事務局長より、これまでの活動状況および今後の予定について報告があった。また、高尾事務局次長より新規入会者および退会希望者の現況について報告があった（審議事項も参照）。

2-2. その他

- ・ 第 25 回学会大会（一橋大学）の会計報告

同大会実行委員の坂委員より報告があった。予想していたよりも多くの参加があったため、学会への寄付として 100,000 円を支出したとのことだった。こうした寄付が過去もあったが、これはあくまで残金が出た場合の措置であり、慣例化すべきではないということが再度、確認された。

また、同大会で講演をされたアーロン・ミラー氏よりインターネット上での動画の公開について依頼があったが、これについては学会でアカウントを作成・動画アップロードし、そのリンク先をミラー氏には周知していただくという方向で、広報委員会および研究委員会を中心に作業を進めていくことが確認された。

- ・ 第 27 回大会について

杉本理事長より、順天堂大学お茶の水キャンパスでの開催（時期未定）について、同大学所属の北村薫会員から内諾を得ているとの報告があった。ただし、あくまで候補の一つであり、もし他に候補を名乗り出るところがあれば、今後検討していくとのことだった。

3. 審議事項

- ・ 編集委員会

山下委員長より、副編集長の設置要求、二重投稿に関わるガイドラインの新設および同ガイドライン作成のための検討委員会の設置要求について、それぞれ審議が求められた。副編集長の設置については、次期委員会への引継ぎ事項とすることで了承された。二重投稿をめぐる規定については、自然科学系と社会科学系の業績数の格差などもあり、会員の業績作成の足枷とならないよう極めて慎重に対処すべきとの意見が提出された。今後、編集委員会の中で原案作りに取り組んでいくことが了承された。

- ・ ウェブアンケートの依頼について

事務局より、全国大学院生協議会（全院協）から要請された「大学院生の研究・生活実態に関するアンケート調査」への協力の可否について審議が求められた。審議の結果、

情報提供に際して学会活動として有益かどうかという観点から見た時、妥当とは言えないことから、今回の協力は見送ることが承認された。

・ 25周年記念誌編集委員会

松田委員長より、印刷・編集費以外の委員会活動に関わる経費（文字起こし、資料探索・整理、委員の交通費、発送送料）について、129,380円を新たに特別会計から補正予算として支出してほしいとの要求があった。審議の結果、承認された。

・ 会則およびホームページ上の誤字の修正について

杉本理事長より、会則第3条第2項「研究会、後援会等の開催」という記述を「研究会、講演会等の開催」に訂正する改正案が発議された。審議の結果、同改正案を3月の総会に上程することが承認された。ただ、ホームページ上の文言については、速やかに修正するということが承認された。

・ 購読会員の削除について

事務局より、会員種別中にある「購読会員」（会則第5条第4項）を削除する改正案が発議された。創文企画への業務委託開始以降、学会誌は書店やインターネットを通じて購入してもらうことになっており、すでにこの種別は形骸化していることが理由として提示された。審議の結果、同改正案を3月の総会に上程することが承認された。

・ 理事会運営規定（案）について

杉本理事長より、同規定案の原案について審議が求められた。具体的な修正案や意見があった部分は、以下のとおりである。

①【原案】（決議事項）

第10条 次の事項は、理事会の決議を経なければならない。

【修正案】（審議事項）

第10条 理事会は、次の事項を審議する。

②【原案】 第2条

2 監事は、理事会に出席し、職務遂行に必要な場合には意見を…

【修正案】 2 監事は、理事会に出席し、必要に応じて意見を…

③第5条における招集権者について、これほど詳細な規定が必要か疑問である。

④改廃規定を設けておく必要がある。

⑤書面会議に関する規定を設けておく必要があるのではないか。

以上の点を踏まえて、3月の理事会にて再度審議を行うこととなった。

・ 顧問の推薦について

事務局より、理事会から顧問を推薦するにあたり、新規候補者の被選挙権をどのように取り扱うべきかについて審議が求められた。顧問就任の可能性等を被選挙人名簿等で指示するなどの案も出されたが、審議の結果、選挙と顧問就任については分けて考えることになった。具体的には、顧問就任の打診を理事会から行い、その結果として内諾を得ることができたとしても、被選挙人名簿にはこれまで通り氏名を記載するということが承認された。

なお、新規候補者および再任候補となる現顧問のリストについては、事務局で整理した後、9月中に書面会議にて審議するということが承認された。

・ 選挙管理委員会の設置について

杉本理事長より、選挙管理委員会設置の発議があった。審議の結果、松田恵示会員（委員長）、後藤貴浩会員が同委員会を担当することが承認された。

・ 倫理委員会の立ち上げについて

杉本理事長より、倫理委員会の立ち上げを要する案件が発生したとの報告があり、これについて審議が求められた。審議の結果、倫理委員会を設置し、委員会の人選については理事長に一任するということが承認された。

・新規入会者の承認について

事務局より、平成 28 年度新規入会希望者について提案があり、審議の結果、計 5 名の新規入会が承認された。

4. その他

・次回学会大会に関する書面会議について（予定）

来年 3 月に信州大学長野キャンパスで開催予定の第 26 回大会の原案については、今後、研究委員会および同大会実行委員会を中心に検討を進め、9 月中に書面会議で審議を行うということでした承された。

・平成 29 年度予算案および平成 28 年度決算報告について（予定）

12 月末日で会計年度が終了するため、来年 1 月以降の事業計画および予算要求については、11 月中に書面会議を行うことでした承された。なお、各委員会は平成 28 年度の会計決算を、来年 1 月以降速やかに事務局まで報告することも併せて確認された。

以上



9. 影山健会員追悼

本学会の創設に尽力され、初期の理事第 1～2 期（1991～94 年度）を務めてくださった影山健会員が 2016 年 6 月 16 日にご逝去されました。影山会員のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今回、影山会員の追悼文の作成を、本学会会員ではありませんが影山会員ともっとも近い間柄（師弟関係）であった岡崎勝氏にお願いしたところ、ご快諾いただきお寄せいただきました。感謝申し上げますとともに、以下に掲載させていただきます。

影山健先生の残したもの：問い続けることの希望を示した先生

影山健先生が昨年 2016 年の 6 月 16 日に亡くなられた。3 月末にお見舞いに伺ったときには、ご自宅の病床ではあったが、手元にオリンピック関連の新聞の切り抜きや雑誌を置いて、「東京オリンピックにはきちんと反対しないとイケない。問題をいんぺいするのは駄目だ」と繰り返し私に訴えられた。

影山先生は私にとって第一の恩師であると言って憚ることはない。スポーツ社会学や教育への洞察を学んだだけでなく、「生き方」さえも先生から教えを受けたと思っているからだ。先生のことを思い返すと、私の不十分さや至らなさが多くて、先生にはもうしわけないことばかりだった。それでも、20 代のはじめから先生に指導を受け、一緒に研究し、市民運動や政治的な活動をしたことはすこぶる楽しかったし、貴重な経験ばかりで、そこから学んだことは大きかった。極私的なことにもなろうかと思うけれど、戦後の体育・スポーツ社会学へいくつも重要な提言をされてきた「影山健」という人間について少しばかり書いてみたい。

1 影山先生との出会い

1970年代「体育・スポーツ社会学」には、活気のある研究者（私にとっては先生ばかりだが）がたくさんおられて意気盛んだった。私は1971年に愛知教育大学の保健体育科に入学し、二年生後半から、佐々木久吉先生のゼミ生となった。『精神としての身体』（市川浩）やメルロポンティの身体論がブームで、私も身体論をテーマに選んだ。学内では大学闘争が収束し、静かになっていた。授業は佐々木先生の「体育科教育学」以外は、興味がわからず、佐々木先生の授業とドイツ語以外は、ほとんど授業に出なかった。佐々木先生と数人で「宇宙における人間の地位」というM. シェラーの原書を読んでいた。当時の私は仲間と「大学授業のカリキュラムは自主的に、評価は自己評価で」という学生闘争を教官相手にしていたので、それ以外は「ああ、つまらない」と毎日過ごしていた。ある日、佐々木先生に突然呼ばれ、「影山健というスポーツ・体育社会学の研究者が東京にいるので、卒論は彼に指導してもらいなさい」と言われたのだ。

それから、一か月か二か月に一回、上京し、当時、都立大学におられた影山先生のところに通うことになる。しかし、先生は私の論文の話など聞かずに、もっぱら、自分のテーマについて蕩々と話す。当時計画中の「スポーツを考えるシリーズ全五巻」（大修館1977年刊）の企画書を私に見せながら、編集の難しさやおもしろさをいくつか話してくれた。

京都の体育・スポーツ社会学合宿研究会にも誘われ、機能主義的社会学の方法論が席捲している中で、私はマルクス主義社会学やフランクフルト学派の社会学をこざかしく先輩研究者にぶつけた。先生は、それを笑ってながめながら、「まあ、とにかく、たくさん読んで書きなさい」と言うので、何を読めばいいですか？と聞くと、「なんでもいいんだよ、読みたいものをどんどん読む、どうせ分かることしか分からないし、分からないことは分からないんだから……」と言われ、その言葉で、かなり元気になった。その研究会で、当時は影山先生が体育・スポーツ社会学の研究者としてのリーダーの一人なのだということも確認できたのだ。

スポーツ史の稲垣正浩先生が愛知教育大学に赴任されたのが、ちょうどその頃だった。稲垣先生にとってはスポーツ史学の確立の初期で、研究で使う言葉にはきわめて厳しかった。稲垣先生の引越しの手伝いに行ったとき「影山先生はスポーツをどう定義されているのか？」と、私に尋ねられた。同じくらいの年齢で、影山先生に対する研究者としての「ライバル的殺気」を稲垣先生から感じたし、それを影山先生に伝えたときのキッとした先生の顔にもやはり「ライバル的殺気」を感じ、日頃は穏やかなのに、いざ、研究になるとすごいなあと感じたことは忘れがたい。お二人は、岸野雄三と竹之下久蔵という大御所のそれぞれの師弟であり、分野は違えどもお互いに気になっているのだろうなと思った。最後まで稲垣先生と影山先生は、違う方法論と研究者としてのあり方をそれぞれ徹底的に貫かれた。今、お二人がいらっしゃったら「東京オリンピック」への問題提起を一緒にできたかもしれないなと思ったりする。

私は一年大学に残り、翌年名古屋の小学校の教員になったが、二年ほどで、稲垣先生はすぐに奈良に移られ、入れ違いに影山先生が愛知教育大に赴任された。すぐに先生から電話があり「研究会をしよう」ということになり、学部生・卒業生を含めて、十人ほどの「五十日会」が発足した。先生曰く「五十日くらいあれば、人間は変わる」ということで、研究会を始めたのである。

テーマは体育・スポーツの問題点をメンバーが順に洗い出し、論点を整理しながら話し合うということだった。当時は、すでにメンバーからはポストモダンの視点が出されていたし、影山先生も黙って聞いている人ではなかったのだ。毎回盛り上がった。ただ、批判

意識のないレポートには酷評も辞さず、正直「そこまで言わなくても」というくらいだった。酷評されて、足が遠のく参加者も少なくなかった。トヨタに勤める労働者から「トヨタ方式」の批判を聞いたり、「原発の課題と廃棄への道」をエコロジー研究者から学習したりと、ゲストも多様だった。

2 反オリンピックと「トロプスTROPS」

1977年名古屋オリンピック招致の声があがった。研究テーマに「オリンピックと社会」ということがあげられるようになり、産業社会批判から、近代オリンピックや国体など現代のビッグ・スポーツイベントの問題点を論じることが多くなってきた。

1980年の秋「簡素なオリンピック」を提案する革新団体が、「オリンピックを考える会」を中心に活動を始めた。はじめからそれに参加していた先生は、積極的に発言されていた。何回目かの拡大集会に参加されたあとのことだが、二人で帰る途中、「岡崎君、オリンピックを考えてばかりでいいのかな？」と言って、その足で大学に帰り「オリンピックそのものに反対するべきではないか」と提案された。私自身も「考える会」のはっきりしない流れに疑問といらだちがあったし、すでに、名古屋大学の経済学者水田洋先生に会って、全面的に名古屋オリンピック招致に反対するのが民主主義だという意見を聞いていたので、影山先生の意見に全面的に賛成した。

影山先生は1981年5月「反オリンピック研究会議」を設立し、「体育・スポーツ研究者がオリンピックの問題にもっときちんと言及し、オリンピックは廃棄することが一番建設的だ」と主張し、活動をはじめた。体育やスポーツ関係者がオリンピックの全面的批判をするということは珍しいと言うより、「異常だ」と言われていた。しかし、先生はそうした異論にぶれず、盛り上がってきた「オリンピック招致反対市民運動」に積極的に関わった。「全面反対は展望がない！」という批判に対しては「廃棄こそ展望」とはっきりと言われた。そして「常に一般市民と一緒にあってオリンピックの問題性を考えるべきだ」と積極的に市民集会に参加するようになった。

そして『反オリンピック宣言』(風媒社)を水田先生と編んで、あちこちで学習会やデモ、集会など、かなり活発に活動された。先生の原則的でラジカルな主張や論調に加え、その人柄の温かさで、影山ファンも増えた。先生は多くの人に支持され、先生もその市民の声に勇気づけられることとなった。

反オリンピックの活動と同時に、先生は競争原理に対する「協働的運動・ゲーム」を、提起された。競争原理よりも協働原理を重視するということで、スポーツの逆読み「TROPS(トロプス)」と称した。つまり競争スポーツ中心のオリンピックに対するカウンターとしてのトロプスである。マイノリティーやマージナルな文化を重視し、そこでは、競争より協働を重視した文化があることを確認した。そして、近現代の競争文化を批判しようと具体的な運動・ゲーム群を考案し、構造化したのだ。

1988年のオリンピックがソウル開催に決定し、反名古屋オリンピック闘争は一応終結した。『みんなでトロプス』(1984風媒社)を編んで、市民集会や教育集会などで、反オリンピック的なスポーツ・体育批判をしながら、協働的な「すぼ一つ」やゲームを楽しむワークショップのために、先生は全国を奔走した。私も、影山先生との旅行が多くなった。

このワークショップでは、かならず参加者から笑顔や歓声があがり、トロプスの楽しさが目の前で実証されることに我ながら驚いた。影山先生のレクチャーは柔軟であり、常に具体的で身近な問題から始まるので、声高に「競争原理」や「勝利至上主義」を批判するより、効果的であった。弱者やマイノリティー、あるいは、運動音痴などと揶揄され、排

除される人たちには、「勇気を含んだ優しさ」の必要性を語りかけ、元気づけられた参加者からも支持がされた。

あるとき、門限の非情に厳しい「青年の家」の宿舎を、深夜抜け出して、居酒屋に行き、「明日の朝礼に、参加者に声をかけて一緒に日の丸・君が代を拒否しよう」と先生が言い出すので驚いたことがある。むろん、私は大賛成したが、日の丸・君が代への強制や、国家権力にも厳しく反対の意志を持っておられたのだ。

3 愛知の管理主義教育批判と愛知県知事選立候補

トロプスと同時に「愛知の管理主義教育批判」として「教育市民運動」という新しい概念を提起したのも影山先生である。当時は、日教組などの組合が「父母と語る会」などで親や市民を組織することが多かった。しかし、影山先生は教員の組合や大きな既成組織からも自立した「市民の教育運動」を主張され、ご自分の住んでいる岡崎市からそれを発信した。

当時は「管理主義教育は西の愛知、東の千葉」と言われるくらい有名だった。とりわけ、体育の授業や身体を対象(体力作りや集団行動訓練)とする教育的働きかけをテコにして、学校全体の管理主義化が進み、子どもたちの人権はまったく顧みられなかった。極度のパターンリズム的な暴力が教育の名の下に展開されていた。

岡崎市の中学生在が教員の生活指導のあとで自死したということもあり、影山先生の怒りも相当なものだった。しかも、自分は愛知教育大学の教授として、教員たちの養成にも手を貸している。その教員が子どもの人権を無視して、管理主義的な規則や体罰を疑問を持たずに容認しているのだ。「静観するのは犯罪的だ！」とまでおっしやった。

先生は、「岡崎市の教育を考える市民の会」を設立して、教育委員会交渉や学校交渉、市民への広報活動と学習会をかなり頻繁に開催した。これは、「教育大学の先生が教育委員会に楯を突いている」と揶揄され、あげくのはては、「影山ゼミ卒業生は、教員採用試験に不利だ」と馬鹿な噂までたった。もちろん、そんな事実はまったくないし、ゼミ生たちはみんな教員になっている。しかし、それくらい、愛知県教委や学校管理職には恐れられた。『草の根教育運動のために』(1983年国土社刊)をまとめ、県内の心ある人たちの結束をはかり、情報誌も毎月発行することになった。私も先生とともに、毎月印刷工場にでむき、情報誌の校正・発送などにつきあうこととなった。

このことで、また多くの市民との交流が深まり、先生の市民運動はますます拡大し総合的になっていった。多くの労働者や知識人との交流、市井に生きる人々と一緒に考え行動し研究していくという姿勢がここでも貫かれた。

そして、愛知国体、愛知高校総体など、スポーツ・体育への根源的な批判を続け、一方で地方自治のあり方などにもその活動範囲を広げていった。

1999年には、2005年の愛知万博誘致への反対の意思表示をする市民の代表として愛知県知事選に立候補することになった。愛知万博は環境博といいながら、強引な誘致や、里山の環境破壊、希少生物の絶滅、高速道路建設などオリンピックと同じような「お祭り型公共投資」であった。そのことに影山先生は早くから異議申し立てをしていた。そして、市民派として、1999年愛知県知事選に立候補したのである。得票数約37%で落選したが、市民派でこれだけの得票は、自然保護のために会場を変更するなど、ずいぶん万博推進に「慎重さ」というブレーキをかけることにもなった。

先生は最後まで先生らしく生きられたと思う。おそらく体育・スポーツ研究者でここまで幅広く、市民の知を大事にされ、民主主義を深く考え、市民の立場を堅持し、政治的対立を恐れないスポーツ社会学の研究者がいただけるか。大学だけでなく、地域や街を「拠点」にしながらも、「社会」を行動的に社会学したと言ってよいと私は思っている。まだまだ書き足りないことがあるが、それはいつかまたの機会にと思う。

常に「研究とは何か?」「何のための研究か?」「権力とは何か?」「民主主義とは何か?」を問い続けることをやめなかった影山先生であった。私自身、不肖の末端の弟子としては、まだ当分の間は先生の残したものを読み解く日々が続くそう。

「岡崎くん、そろそろまた、反スポーツ・反オリンピックを考える市民集会を企画しなければいけないよ、そうだろ?」という電話はもうかかってこないのだという現実はまだ打ちのめされている。

* 現在『影山健 批判体育スポーツ研究論集』(仮題)を作成中である。貴重なスポーツ社会学の論文集を残された者で編んでいます。できあがったら、多くの方に読んでいただきたいと思います。またご連絡ください。ご案内を差し上げます。

岡崎勝(『おそい・はやい・ひくい・たかい』(ジャパンマシニスト刊)編集人。現在、名古屋市立小学校非常勤講師。メールアドレス m-okaza@mb.ccnw.ne.jp)



10. 事務局からのお願い

年が明けますと次期理事会選挙が行われます。今年度年会費をまだ振り込んでいらっしゃらない方、ご所属先や郵便物送付先住所が変わられた方は、速やかに事務局までご連絡いただきますようお願い申し上げます。本会からの郵便物は通常の郵便とは異なり、転居先に転送される設定にはなっておりません。十分にご注意願います。年度会費納入の依頼が未着の方は事務局までお問い合わせください。

事務局長 坂なつこ (一橋大学)



編集後記

リオデジャネイロ・オリンピックが終わってから4カ月が経とうとしている。直前まで施設準備の問題や市民によるデモなどで開催が危ぶまれていたが、終わってみれば大きなトラブルもなく、むしろよい大会だったという声すら聞かれる。国内はすでに東京2020のモードに切り替わっているが、開催経費の高騰と削減、それに伴ういくつかの競技の開催地変更が話題の中心であり、成熟社会におけるオリンピックの姿や役割、といった議論は聞かれない。次大会開催都市（国）としては、リオ大会を多方面から評価する作業は欠かせないと思うのだが、そうした話も耳にしない（私の情報収集不足だと祈りたい）。

しかし、主に海外のメディアにおいてはオリンピックが抱える負の側面に真摯に向き合う報道を見かける。例えばリオ大会で使用されたゴルフコースは未だに有効活用策を見つけれられておらず、管理会社が撤退する危機に瀕している。

<http://www.afpbb.com/articles/-/3109180?pid=0>

またオリンピックをはじめとするメガスポーツイベントが開催地における売春のリスクを高めることは以前から指摘されてきたが、リオ大会においてもそうした現象が起こっている。

http://www.huffingtonpost.jp/2016/08/26/rio-child-sex-trafficking_n_11715002.html

オリンピックやスポーツにおけるこうした面にメディアが一切目を向けない国内において、本学会が果たす役割は極めて大きいだろう。

オリンピックの批判的研究を展開され、反オリンピック運動という実践も進められてきた影山先生が逝去された。謹んでご冥福をお祈りいたします。また追悼文をお寄せいただいた岡崎勝様にお礼を申し上げます。

広報委員 高峰修（明治大学）

- | |
|---|
| <p>◆ 学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き
日本スポーツ社会学会事務局 坂なつこ【事務局長】 高尾将幸【事務局庶務】
E-mail: jsssjimukyoku@gmail.com</p> <p>◆ 学会公式ホームページ
日本スポーツ社会学会公式ホームページ
http://www.jsss.jp/</p> |
|---|